

ネパール大地震報告(7月)

皆さん、お変わりありませんか。

沢山のご支援をいただきながら、長らくご無沙汰してすみませんでした。

地震が起きて3か月、5月にわたくしから最後の報告をさせていただいてからも約2か月たちました。初めの大地震が起きたのが4月25日、28日に現地入りして5月26日一時帰国、それから約1か月日本各地で21回のネパール地震に関する報告をして今回は6月28日ネパールに戻りました。ここでは、この1か月の活動報告と皆さんからお預かりした義捐金をどのように今まで使わせていただいたかの報告、それにこれから被災者の方々にどのように支援していくかの計画案を示します。

6月末、カトマンズに戻ってみると、ほぼ地震前の状態に戻っていました。交通量、騒音も旧態同前、スーパーもタメルのお土産屋も一部の店を除いてほぼ全店が開きました。5月と違ったのは、救援の人たちも帰ってしまったためでしょうか、カトマンズ飛行場が閑散としていたこと(話によると国際便も軒並み減便して、タイ航空は週7便が5便に、料金も普段の5割から7割になっているとのことです)、外国人相手のタメルノ商店、ホテルに人がいないこと、まだカトマンズ一の大きな公園、ラトナパークに減ったとはいえ、中国製のテントが100張りぐらい残っていること、食料品、レストランの値段が1,2割上がったことなどでしょうか。

ただネパール人のたくましさには驚きます。雨期が始まったこともあるのでしょうか、シンドバルチョーク、カトマンズ近郊どこでも、もうすでに仮設住宅をトタンで作ったり、倒壊した家の壊れた部分だけ取り除き、ビニールシートやトタン板で屋根を急ごしらえし、たとえ評価がレッド(住めない、黄色:直して住める、緑:問題ない)でも、ほかの選択がないためでしょう、住み始めていました。

行程

今回のネパール滞在約1か月の活動の概略は、

6月28日

*カトマンズ着

6月29日

*コカナ、ハンセン氏コロニー訪問、義援金を渡す。大使館、ラリトプール看護学校訪問
*大泉どさんこ代表、清水直美さん(どさんこ会員、元JICAネパールシニアボランティア)、被災者に今後どさんことしてどのような支援が適切か検討のため来ネ。

6月30日

*カトマンズ近郊 Yubu 地域視察。今回の地震で倒壊した家屋が多い地域。
*アナンダバン診療部長、元ラムジュン病院事務長、HDCS 保健担当カビル、ゴルカ震源地近くで救援をしている、日本人浅原さんと面談。

7月1日

*シンドバルチョーク、Melanchi 近郊の丘陵地帯、被災のひどかった地域を慰問。

7月2日

*JANTRA(結核予防会)訪問、本来の活動、地震後の救援活動について話を伺う。
*大使館でラチトプルール看護学校の支援について担当官と協議

7月3日

*アートセラピーを3回お願いしたサリタドンゴルさんと今後の可能性について協議。
*前田紀子さんカトマンズ着(元JICAネパール隊員、理学療法士、今年6月タイ、マヒドン大学 MPH(公衆衛生修士)修了)、今後ネパールで「どさんこ」のワーカーとして働けるかどうか視察のため来ネ。

7月4日

*バクタプール近郊、Sanga, Spinal Injury Rehabilitation Center(脊髄損傷理はセンター)訪問。今回の地震による被災の影響か入居者が倍に増えていた。
*バクタプール世界遺産観光、かなりの建物が被害を受けたが後片づけをし、入場料を取り、観光客を受け入れている。訪ねる外国人はまばら。
*バクタプール、岩村記念病院視察、今回の地震による被害は軽微。

7月5日

*アナンダバン病院訪問、チャパガオン診療所(PHCRC)訪問
*古川先生(関西学院大学社会学教授、サバティカルでカトマンズに滞在し、地震関連も含め調査中)にお会いし、その後のカトマンズの様子を伺う。
*清水直美さん離ネ。

7月6日

- * Hikmat Katri 氏と Yub Raj 氏を私のコンサルタントとして3か月の契約でお願いする、彼ら2人にはどさんことして今回の地震被害者への支援をどのようにすべきか、現地調査をして提言をしてもらうことにする。
- * ライトプール看護学校を訪問し、支援金を渡す。
- * CMC-Nepal 訪問、ネパールの精神保健関係の NGO、今回の地震被害者への取り組みを聞く。
- * UMN 本部訪問、オーカルドンガ病院の被害は軽微とのこと。
- * Console Mission, Rajin 氏から支援活動を聞き、支援金を渡す。
- * 大泉代表離ネ。

7月7日-13日

- * 前田さんとともにチョウジャリ訪問、主な仕事は
 1. チョウジャリ病院公衆衛生部門の昨年の評価、来年度の計画、予算づくり。
 2. ネパール保健医療育英会の今年度の試験。3人を選抜する。
- * 森先生夫妻、山本看護師問安。5月中旬から毎日忙しく手術に追われている。

7月14日

- * お母ちゃんホーム(旧岩村昇医師、史子夫妻のカトマンズでの住居)訪問。養女 Purunima さんから地震被害の状況を伺う。義捐金を渡す。

7月16日

- * ネパール地震どさんこ支援検討会議。Hikmat, Yub Raj 氏2人が4日間かけてゴルカ、ダーディン郡を調査して15日帰宅。彼らの調査報告を聞く。
- * チチリア(イタリア女医)カトマンズ着。チョウジャリで3か月研修、帰国前に被災地でボランティア活動をしたいとのことので我が家に泊まる。

7月17日

- * HDCS 訪問。ABBS 訪問。前田さん、チチリア同行。保健担当、元チョウジャリ病院事務長 Kapil に会い HDCS、また地震後の救援活動について話をきく、その後建物が隣接し、HDCS が運営する障害者デイケアセンター ABBS を訪問。
- * 金曜集会。我が家で7人参加。

7月19日

- * 第2回救援支援検討会議
- * JOCV(青年海外協力隊)今年度ネパール隊員8人が加わり食事。
我が家で、救援支援検討会議の後、H i k u m a t, Y u b R a j, チチリア、前田さんに8人の J O C V 隊員(一人シニアボランティア)が加わり、食事会。
若い隊員への助言、先輩、ネパール人から多数。

7月20日-22日

- 地震被災地視察、救援のため、20日の午前中、救援、配布物資をカトマンズで購入し午後1時ダーディン郡へ向け出発。4時半、現地ダーディン郡、郡都ダーディンベシ到着。Hikmat, Yab Raj, チチリア、前田、檜戸の5人。
- * ダーディン郡立病院視察
- * ダーディン郡、郡庁責任者(CEO)面会
- * ダーディン郡で元々活動する NGO, Shanti Nepal 訪問。Krishna Man Shakya 代表と懇談
- * Alchidada 避難所代表たちと懇談。
- * 避難所で診療活動2日。避難所で子供たちに学用品の配布。臨時教師2人を選び、契約、指導。

7月23日

- * 第3回救援支援検討会議
- * JANTRA 代表 Sharan 氏と面談。

7月24日。帰国

7
支援先

皆様から支援していただきました、ネパール大地震の義援金は、私に個人的にお預かりしたのものも含め、いったん「どさんこ海外保健協力会、ネパール大地震義援金」の中にすべて入れ

させていただき、そこから使わせていただいています。ありがたいことに今までに 1000 万円を超える義捐金が全国から寄せられ、7 月末の段階でその中から約 700 万円を緊急支援としてネパールの被災者を支援する 13 団体、個人にお渡ししています。その支援先は以下のようです。

1. HDCS

わたくしが 2005 年、日本キリスト教海外医療協力会からネパールに派遣された時のカウンターパート。ネパールのキリスト教団体でいくつかの社会活動を行っている。チョウジャリ病院とゴルカ郡の中心地、ラムジュンにある郡立病院も HDCS が運営している。数位年前からどさんこ海外医療協力会もチョウジャリ病院の公衆衛生部門を応援している。今回、チョウジャリ病院の被害は軽微であったが、ラムジュン病院は手術場を始め病院本体、そしてとくにスタッフの住宅、研修等の損害が大きい。建物の多くに亀裂が入り、職員住宅のいくつかは住めない状態。病院は震源地に近いこともあり、地震後すぐに職員が手分けして被災地に緊急物資を届け続けた。緊急物資購入のためと、病院、その他の建物の修理、新築のために義捐金を渡す。

2. アナンダバン病院

開院から数十年はハンセン氏病専門病院であったが、ここ 10 数年近隣の一般の患者の外來、入院も行っている。JOCS からの派遣で宮崎信子助産師がもう 20 年近くなるがここで 12 年間奉仕した。高校生のワークキャンプも何回か引き受けていただいている。近年は衣笠病院の毎年のスタディツアーの奉仕地。JOCS も職員への奨学金支援を続けている。今回の地震で被災した近隣の患者さんを引き受けただけでなく、病院職員も手分けして被災地に支援物資を配布した。病院の被害は古い本館の一般患者病棟のみ。ここ 2 か月 UNICEF 配布のテントを運動場に設置し外国からの奉仕者も含め治療に当たっている。

3. JANTRA

民間の結核予防会。日本の結核予防会が指導、応援している。医学生、看護学生が研修のためネパールを訪れた際、よく見学させてもらっている。代表者 Sharan 氏には昨年チョウジャリに来てもらい、結核の予防について指導を受けた。JANTRA が運営する診療所のいくつかがかなりの被害を受けたことと、地震後すぐに職員が手分けして被災者に緊急物資の配布を行った。

4. PHCRC

チャパガウンにある診療所。昔、元 JOCS ワーカー俵友恵さんが 2 年間働いた場所。当初 UMN 運営、その後 UMN から受け継いだ Shanti Nepal、今は地域に運営が任されている。ここはネパールではモデル的な診療所で、カトマンズの多くの看護学校の研修場所。カトマンズからアナンダバンに行く途中、車で 30 分。近いこともあり、学生にネパールの診療所を見学させたいときにはここに連れていく。診療所の研修棟などが被害を受けた。またチャパガオンはネワールの古い町で壊れた家も多く、地震後は救援活動、緊急物資の支援など、職員は忙しく働く。

5. GFA

ネパールのキリスト教団体。代表のナラヤンさん、奥さんの秋山和美さん(元岩村先生を支える会ネパール派遣ワーカー、看護師)はわたくしの昔からの友人。震災直後から全国各地にある教会の教会員が精力的に被災地に救援物資を車がいけないところは歩いて届けている。

6. Console Mission

ネパールのキリスト教系社会活動 NGO。震災救援活動の代表者 Rajin Maharajan はむかしの HDCS のスタッフで私の友人。会の代表者は彼の父親で AHI(アジア保健研修所)の初めの受講者。今も遠く離れた村々に救援物資を届け、仮設住宅の建設を援助している。

7. カブレ郡

昨年まで我が家に同居し、カブレの村で文化人類学の調査をしていた京都大学博士課程の安念さんの村を訪ねる。今回の地震で大きな被害を受け村の全体がほぼ全壊、半壊状態。食料品を届け、村人を診療。

8. ヒックモトさん

私の昔からの友人(細井元 JOCS ワーカーを通じて)。トリブバン大学教育学部講師。彼の村、ゴルカ郡カトリ村にどさんこ会員も含め、ちょいちょい日本人の医学生、看護学生が泊まりお世話になっている。今回の地震で彼の家の被害は軽度であったが、村では全壊した家もあり、復旧のために義捐金をお渡しする。

9. コバン

ネパールで高校生にミシン、縫製を教える戒能恵子さんの住んでいるタサンビレッジの近くの村。ここ9年来、戒能さんの友人たちが「お絵かきチーム」としてこの地をおとずれ小学校の生徒たちに絵を指導してきた。タサンビレッジの主人、アルジュンさんを通じて、学校の修復、整備に義捐金の一部をお渡しする。

1 0. 心のケア

私たちの友人のネパール人画家、サリタドンゴルさんにお話し、震災で大きな心の傷を受けた子供たちに絵を描くことによって、少しでも心の傷をいやしてもらおうとの願いで、奨学生を対象にお絵かきプログラムをカトマンズ近郊、3か所の村で実施。

1 1. コカナハンセン氏病回復者コロニー

カトマンズ近郊コカナ村に昔からハンセン氏病者、今は回復者コロニーがある。入所は約200人。20年近く前、現在埼玉県立大学で看護を教えている山口乃夫子看護師が2年ここで奉仕をしていた。看護学生などが来ると、ここで見学、実習をさせていただく。今回の地震でコカナ村はかなりの被害を受けた。コロニーでも診療所、入居者住宅にかなりのひびが入った。建物再建のため、入居者の必要物資購入のために義捐金をお渡した。

1 2. Lalitupur 看護学校

昔のシャンタバワン看護学校。元 JOCS 派遣の友友恵ワーカーが20年近くこの学校で教鞭をとられた。現在、カトマンズの主な病院の給婦長クラスは依さんの教え子が多い。現在、JOCS は教職員の奨学金で応援し、聖路加看護大学の昨年のスタディツアーの研修場所。ラナ時代の昔の建物を教室、ホステルに使っていた。今回の地震で、後で新築した建物を除き、この古い建物にかなりの亀裂が入る。現在廊下や別の場所で授業を再開。とりあえずの仮教室建設のために義捐金をおわたした。

1 3. お母ちゃんホーム

1960年70年代、岩村昇医師夫妻が活躍された時の、カトマンズの住居。人呼んで「お母ちゃんホーム」。わたくしも1973年、初めてネパールに「NCC 学生ネパールワークキャンプ」の付き添い医師としてきたとき、泊めていただいた。今現在は養女の Purunima さんたちが住んでいる。今回の地震で建物に何か所も亀裂が入る。修理のために義捐金の一部をおわたした。

1 4. ダーディンベシ、Alchidada 避難所生活者

ダーディン郡、郡都ダーディンベシ周辺だけでも、今回の地震で家を亡くした山間部の住民が郡都近くに避難してきて生活しているキャンプが10数か所ある。その中でも一番大きく(約800人)、他の NGO があまり関与していない Alchidada 避難所に医療、教育両面から支援する。

どさんこネパール大地震救援検討会

地震後3か月、緊急支援の時期を一応過ぎ、今後、皆さんからお預かりした義捐金をどのように使うのが一番、被災者の役に立つのかを検討するための調査に2人のネパール人友人をお願いする。一人は医療の専門家、Yub Raj 氏。彼は昨年まで12年間ラムジュン病院の事務長。病院運営ばかりでなく、学校保健、健康保険についても詳しい。もう一人は Hikmat 氏、昔からの友人で現在トリブバン大学教育学部講師。

第一回会議

7月16日。Hikmat, Yab Raj、前田、檜戸。前田、檜戸がチョウジャリに行っている間、Hikmat, Yab Raj 氏2人は、今回の被災地の2郡、ゴルカとダーディンを4日かけて訪問調査。帰宅後の報告で、救済地の候補としてダーディン郡、郡都ダーディンベセが上がる。郡病院、郡庁関係者に知人が多いこと、郡病院への協力が可能なこと。近くに被災地からの避難民約800人がテント暮らしをし、衛生、教育両面の環境が劣悪であることなどが主な理由。そこで20日からダーディンベシを訪問し、関係者と会い、当面どんな協力ができるか検討することとする。

第二回会議

7月19日。Hikmat, Yab Raj、前田、檜戸、それにイタリア人医師チチリア(今年ミラノ医学部卒業)、3月から3か月半チョウジャリで医療研修。地震への義援金を家族、友人から託され、被災地での奉仕を希望も加わる。改めて2人から調査の報告を受ける。20日からの訪問は前回決めた、ダーディンベセ。必要品を購入し、午後1時カトマンズ発。避難所に設置する仮設診療所はチチリアがあずかる義捐金から、約6万円。児童への学用品、約10万円はどさんこ義捐金から。

現地視察、救援活動。

奥地山岳地帯の避難民がテント生活をしている Alchidada 避難所はダーディンベシの中心地から丘を登ること 30 分。山肌を切り開いて平地になっており、そこに約 400 世帯が足の踏み場もないほど、ぎっしりとテントやシートで仮小屋を作り生活している。生活状況は一目見て劣悪。水場は隣接して 1 か所。そこで飲み水を汲み体を洗う。トイレはそのそばにこれも仮小屋で男女分けて 10 数個。食料品は政府、赤十字などから配給されて野菜を除き足りている。プロパンガスも 2 軒に 1 つの割で配給されている。5 分も下に歩けば小さな雑貨屋が何軒かある。

*今回は 21 日 4 時間、22 日 3 時間、一つのテントを仮設診療所にして住民を診る。21 日は休日で病院が閉まっていたためか患者も多く約 100 人。22 日は約 30 人。チチリアとわたくし、2 組で診療、前田さんが血圧測定と聞き取り、Hikumat, Yub Raj 氏は患者整理にあたる。住民の大部分がタマン族。タマン語からネパール語に通訳を介して診療。21 日は病院から HA(准医師)4 人も手伝ってくれる。テントの中はうだるような暑さで、あせも、頭のおでき、風邪、胃腸炎などが多い。肺炎の疑い、骨折の疑い、やけどの子供などを病院に紹介。

*子供たちに学用品を配る。200 人近くの子供たちは学校に通っていない。そこで避難所の代表者たちと協議を重ね、2 人の教育補助者を避難所の中から選んでもらう。男女各一人。1 か月 8500 R (約 1 万円) で 1 日 5 時間、涼しい時間に子供たちを集め、勉強というより、生活指導を中心。

*新たに仮設診療所(かまぼこ型テント)を設置した。この費用はチチリアがお母さんから預かった義援金の中から出してもらう。中で働く医療人は協議の結果 Shanti Nepal の方から出し、私たちが指導に当たることにする。

第 3 回検討会議

7 月 23 日。Hikmat, Yab Raj、チチリア、前田、檜戸の 5 人。

ここで決まった今後の方針

1. これからの 3 か月、どさんこネパール地震救援チームは、ダーディンベシの Alchidada 避難所を主な支援活動場所にする。
2. 新たに、前田紀子さんがどさんこのワーカーとなり Hikmat, Yab Raj 両氏と協力しその任に当たる。
3. 3 人は定期的に現地を訪問し、関係機関と調整し避難所の医療、教育両面で指導に当たる。
4. その間時間を作り、他の被災地を訪問し、3 か月後には、長期的な支援プログラムが作れるように努力する。
5. このための活動費は、いただいた義捐金の一部を充てる。
6. チチリアはイタリアで檜戸は日本で協力者、義援金を募る。

終わりに

4 月 28 日に現地入りし 1 か月、今回も 7 月半ばまで、皆さんからお預かりした義捐金は主に現地で活動している NGO、団体、個人にお渡しし被災者に届けていただけていました。

ただ、急性期が過ぎて、これから中長期的にどのような支援が一番有効な支援かを検討した結果、今回お願いした 3 人を中心に、これからの 3 か月は、どさんこネパール地震救援チームとして直接ダーディンベシの Alchidada 避難所で生活する被災者を支援していくことにしました。殆ど全村家が倒壊し、山から 2 日間歩いてたどり着いた避難所のテント生活はかなり劣悪で、まだまだ支援が必要と考えたからです。

皆さんからは今までにもたくさんの御支援をいただけていますが、これからもネパールを覚え、引き続きご協力いただけますよう、お願い致します。

7 月 24 日。カトマンズ、檜戸健次郎